



《春の海》1974年 山口県立美術館蔵

特別展「小林和作展」

会期 2月11日(土・祝)~3月26日(日)

本作に描かれているのは小林和作が子供のころに毎日魚釣りに通ったという故郷秋穂の風景で、残っていた約50年前の写生画をもとに制作されたという。春の海の情感を湛えた本作が最後の展覧会出品作となった。

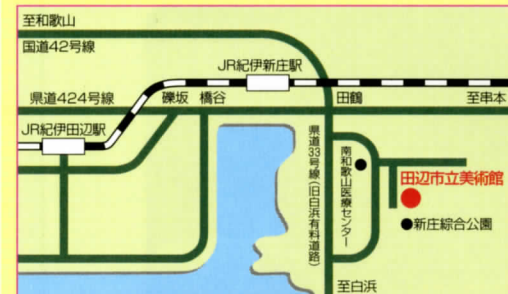
最晩年の和作の作品の筆触はそれまでのものに比してかなり和らいだものになり、色彩も穏やかなものとなっている。そこにみえるのは熟練された色彩の効果である。本作の近景から遠景にかけての色彩による空間の秩序づけは和作ならではのものといえよう。
(学芸員 三谷 渉)

美術館あれこれ② 展示について

美術作品にはいろいろな種類があり、また、展示する会場にもさまざまな場所がありますので、そのシチュエーションにあわせた展示方法をとらなければなりません。例えば、作品の種類から見た場合、油彩画などの額に入った作品については壁面展示でも比較的問題ありませんが、掛軸や屏風をはじめとする紙などでできた、しかも画面がむき出しの作品については、ガラスケースに入れたりカバーを付けるなどの方法をとります。なぜならこのような紙類で出来た作品はとてもデリケートなため、温湿度の急激な変化やホコリ、虫などの外部からの影響によってすぐに傷んでしまうからです。これらの条件は展示会場についても当てはまります。例えば、外からの光が入るような場所での展示はできるだけ避ける、照明を当てる場合も強い光はなるべくあてない、など。ただ、このような展示に伴う条件というものは、見る側にとって好ましいものとは言えません。(ケースに入っているため遠くで見にくい、明かりが暗いのでぼやけて見づらい、など)。展示を計画するとき常に美術館が頭を悩ませる部分がこのバランスのとおり方といえるでしょう。
(学芸員 辰巳 充)

利用案内

田辺市立美術館



JR紀伊田辺駅から明光バス「新庄病院前」下車、徒歩5分。
〒646-0015
和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770
FAX.0739-24-3771

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館



JR紀伊田辺駅から龍神バス「なかへち美術館」下車。
〒646-1402
和歌山県田辺市中辺路町近露892
TEL.0739-65-0390
FAX.0739-65-0393

表紙作品紹介 渡瀬凌雲《那智瀑底》1963(昭和38)年 熊野古道なかへち美術館蔵

1958年、54歳の渡瀬凌雲は有志の招きに応じて単身アメリカに渡りました。約一年間の滞在中、各地で個展を開き、テレビ出演や南画を通しての文化交流などに忙しい日々を過ごしました。沢山のスケッチと豊かな経験を得たこのアメリカ時代は、凌雲の作風を変える一つの分岐点となりました。絵にはそれまでになかった題材が加わり、作風はより自由で豪胆なものへと変化していきます。その成果はまず帰国翌年の作品《ナイアガラ瀑布》で発表され、続いて《残照グランドキャニオン》に、三年後には以前より繰り返し描いていた那智の瀧が、このような新しい形で表現されました。瀑底にかすかに虹のかかったこの作品は、凌雲59歳、第3回日本南画院展に出品したものです。
(学芸員 山本 泰代)



渡瀬凌雲《那智瀑底》1963(昭和38)年 熊野古道なかへち美術館蔵

編集後記

早いもので、もう年度末。今年度は美術館広報誌「ORANGE」を発刊することが出来たことを大変嬉しく思っています。内容・企画等についてはまだまだ模索しているところですが、もっと絵画に親しんでいただきたく、初春の薫りとともに「絵画と出会うこの1点!」という新しいコーナーを設けました。本誌についてのご意見・ご感想なども館内のアンケート用紙にご記入下さい。
(本館 Y. M.)

田辺市立美術館NEWS
ORANGE Vol.3

発行年月日: 平成18年3月1日
編集・発行: 田辺市立美術館
熊野古道なかへち美術館

小林和作 ゆかりの地 紹介

田辺市立美術館

田辺市立美術館では、2月11日(土・祝)から3月26日(日)まで特別展「小林和作展」を開催しています。ここでは小林和作ゆかりの地を紹介します。(学芸員 三谷 渉)

● 生誕地

小林和作の生誕地は現在の山口市秋穂東1901番地にあたる。瀬戸内海周防灘に面する秋穂湾一帯は和作の生まれた当時、農漁業、塩田、廻船業で潤う豊かな村であり、その中でも小林家は特に裕福な大地主であったようである。「秋穂町史」(秋穂町/1982年刊)によれば幕末、和作の祖父の代に永代苗字、帯刀が許され、永代大庄屋格となっている。

和作の生まれた大きな屋敷の一部は近年まで残っていたが、現在は解体され、記念公園「和作の広場」となっている(写真1)。公園内には胸像や頌徳碑が設置されて当地出身の芸術家、小林和作を偲ぶ場となっている。

穏やかな海でかつて廻船業で栄えたという奥深い秋穂湾の景は和作が後半生を過ごした尾道の雰囲気に通じるものも感じられる。この海に少年時代の和作は毎日のように魚釣りに通ったという。

● 尾道の旧居

広島県尾道市は、小林家の破産がもとで和作が東京から1934(昭和9)年に移り住んで後半生を過ごした土地である。

1920(大正9)年から尾道に住んでいた友人の日本画家、森谷南人子らの世話で最初に落ち着いた尾道市長江の借家を後に和作は買い取って終の棲家とした(写真2)。現在は尾道市の所有となって保存されて

いる。

この家の二階和室のアトリエから数々の名作が生まれた。制作は午前中から午後2時、3時ごろまでに行われ、その後は家を出て長江通りを歩いて下り、映画を見に行くのが日課だったという。

● 墓碑と筆塚

1974(昭和49)年、写生旅行中の不慮の事故で亡くなった和作の墓碑と筆塚は尾道市の西国寺境内にある(写真3)。墓碑は梅原龍三郎、筆塚は中川一政の書によるものである。命日の11月4日には毎年西国寺で和作忌法要と講演会が行われ、その画業と遺徳が偲ばれている。またこの前後の期間、和作忌協賛として尾道市内の商店街のショーウィンドウには絵画が掲額される。



生誕地 (写真1)



尾道の旧居 (写真2)



尾道西国寺の墓碑と筆塚 (写真3)

Information

会 期 2月11日(土・祝)～3月26日(日)
 開館時間 午前10時～午後5時
 (入館は午後4時30分まで)
 休 館 日 毎週月曜日・3月22日(水)
 観 覧 料 一 般 600円(480円)
 大・高生 400円(320円)
 小・中生 200円(140円)
 ※ () 内は20名様以上の団体割引料金
 ☆土曜日は小・中学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料
 会期中の催し 記念講演会/3月4日(土)
 午後2時より、当館研修室
 「小林和作 人と作品」
 講師：高橋玄洋(作家)
 ※観覧料のみ必要(手話通訳有ります)
 特別協力 尾道市立美術館

(写真は筆者の撮影：2005年)

展覧会 紹介

熊野古道なかへち美術館

館蔵品展「渡瀬凌雲展—渡米後の凌雲」3月11日(土)～4月9日(日)

画家の技量や生身の個性がストレートに出てしまうスケッチ。スケッチを見ることは、画家の日記を読むようなものかもしれません。

凌雲はスケッチブックをおよそ150冊遺しました。それらの中でも滞米中のものを見ると、「南画家、渡瀬凌雲」を少し違った角度から眺めることができます。全体にのびやかでカラフルな印象のある楽しいスケッチブックですが、アメリカ滞米後半のものからは、風景などを中心にスケールの大きなものを熱心に「記録」していることがわかります。

作品にしたいという凌雲の意思がはっきりと表れたもの、興味深く観察したもの、楽しい思いを残したもの。異文化の中での経験とそこで吸収したものを作品に投影させるため、凌雲は年月をかけて制作に励み、画家として成長してゆきました。

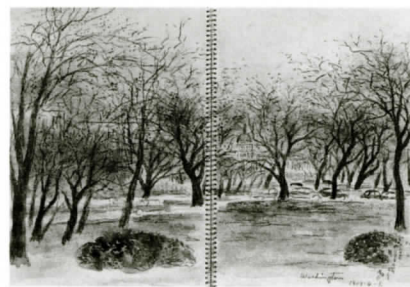
1958年秋、渡米直前に作成した挨拶文の中で凌雲は次のように話しています。「私は風景画家として紀州の外、日本全土の山水、名勝旧蹟等、又、東洋各地の

写生など長い間重ねて参りました。此の度雄大な北米大陸の風物に接しては一層の見聞をひろめ画想も肥やしたいと思ひます。其の上この収穫を故国に持ち帰って発表させて頂くのが私の大きな希望の一つです。恐らく日本内地でも初めてのアメリカ風物日本南画展とも相成る事でしょう。」

本展では、この時代の経験とその後の画風の変化を、スケッチや作品を通して紹介します。渡米をキーワードにしながごゆっくり作品をお楽しみください。

(学芸員

山本 泰代) 《ナショナルギャラリー横より眺む》1959年



渡瀬凌雲



渡瀬凌雲
 《蘇鉄》1976年



渡瀬凌雲
 《雪原(ミシシッピ源流)》1976年

Information

会 期 3月11日(土)～4月9日(日)
 開館時間 午前10時～午後5時
 (入館は午後4時30分まで)
 休 館 日 毎週月曜日・3月22日(水)
 観 覧 料 一 般 210円(160円)
 大・高生 150円(120円)
 小・中生 100円(70円)
 ※ () 内は20名様以上の団体割引料金
 ☆土曜日は小・中学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料